
零崎人織の人間関係 哀川潤との関係

三木拓矢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

零崎人織の人間関係 哀川潤との関係

【Nコード】

N5795M

【作者名】

三木拓矢

【あらすじ】

『零崎一族』

ーそれは殺し名第三位に列せられる殺人鬼の一族

伊織から離れた零崎人織は2年前のように自由気ままな生き方をしていた。

しかしある日人識の前に赤い請負人が立っていた。

新青春エンタの最前線がここにある！

はじまらない おわらない(前書き)

最初に一言

ごめんなさいでした！

はじまらない おわらない

最強最高（最弱最低）

最強とは、ひとえ最も強いこと。

最弱とは、ひとえに最も弱いこと。

最強は、紅く、赤い。

ただひたすらのごとく赤い。

それは最強ゆえのこだわり 最強ゆえの信念。

最強は赤い。

赤いは最強。

彼女は最も強い だからこそ負けてばかりいる。

他人の負けを請けることを生業として。

今日も彼女は強く赤い。

それはまるで。

哀しみの川をながれるひとしづく潤いのように。

殺人鬼とはひとえに人を殺す鬼。

欠陥製品とは、ひとえに欠陥を持って生まれた物。

殺人鬼は黒く暗い。 ただひたすらのごとく暗い。

それは鬼ゆえの生き方。

殺人鬼は暗い。

暗いは殺人鬼。

彼は殺人鬼 だからこそ人に殺意を抱かない。

人を殺して殺さないのは彼の性である。 それはまるで。

零となつた崎をこえ、そして人の識を知る。

これは黒く紅く暗い赤い物語。

タイトル（前書き）

タイトル

第一章

「赤の対義語は黒」

「黒の対義語は白」

「白の対義語は赤」

第二章

「赤と紅の違いってなにかな？」

「そりゃ色の濃さだろ」

「戯言めいた答えだ」

第三章

「赤に何を足したら橙になる？」

「終わり」

「傑作な答えだぜ」

第四章

「赤の同義語は橙」

「橙の同義語は黄」

「黄の同義語は赤」

「ところで黄って誰だ？」

「西東天」

第5章

「最強は赤」

「最終は橙」

「最悪は黄」

「最弱は？」

「黒」

「それじゃ赤の対義語だろう、お前最強と対だって言いたいのかよ」

「戯言チツクだろ」

「傑作的だよ」

タイトル（後書き）

まず一言

ごめんなさいでした！

中身小説じゃないし！

「ゴルフでホールインワン達成　ただしカップとの距離わずか5センチみたいなの」

小説の中身は作者がやる気を出したらきつと書きます……多分。

最後に一言

まじでごめんなさいでした！

零崎人識と・・・の人間思考 〵クビシメロマンチスト〵（前書き）

箸休めって、なんだか書きたくなる不思議

零崎人識と・・・の人間思考 くクビシメロマンチストく

「皆さんこんにちわっ。葵井巫女子こと巫女子たんでっす！463
9ヨロシクウ！」

「…………傑作だ」

「ん？どうしたのひつくんなんか元気ないよっ」

「初対面の奴にあだ名をつけるな」

「やだなあひつくん、あたしとひつくんの仲じゃないっ。それとも
ひつくんもしかして忘れてる！？忘れちゃってます！？」

「いや、間違いなく初対面だろうが」

「うっ、ひつくんなんかクールキャラ『夏はやっぱりクーラーだ、
ただし設定温度は35』みたいなの」

「それじゃクールじゃねえだろ」

「ひつくんナイスツッコミ！」

「傑作過ぎるぜ……。大体なんで俺がこんなことしなきゃいけない
んだか」

「ひつくんがめんどくさがって来なかったからねっ」

「あの欠陥製品野郎……」

「それでそれでさっ、ひっくん遊ぼうよっ」

「絶対断る！」

「あう、ひっくんいじわる」

「なんで、俺が、わざわざ、葵井と、遊ばなくちゃ、いけないんだ」

「だって、お友達だもん一緒に買い物とかしようよー！」

「だから断る」

「ちびのくせに！」

「あ？喧嘩うつてるのか？喧嘩うつてるんだな」

「ナチュラルメイク！」

「言ってはいけないこと言っただなあ前！」

「あれ？モテカワメイクだっけ？」

「そこを訂正したいわけじゃねえ、ナチュラルメイクと呼ぶのを止めろ」

「じゃあ、ひっくんのことなんて呼べばいいのっ？」

「……お前今ひっくんって呼んでじゃん」

「あつ、そう言えばそうだねっ。じゃっいつか。ついでに巫女子たんのことは巫女子たんって呼んでいいからねっ」

「それはねえから葵井で呼ばせてもらっわ」

「よっし、じゃあ早速雑談と呼び方も決まっちゃったことだし、お話しに入ろっか」

「あ？お話し？」

「あれ？聞いてなかったのっ？今日はひっくんとあたしでクビシメロマンチストについてお話しするんだって」

「はあん、だから欠陥製品の代わりに俺とお前か」

「そういうことだねっ」

Q クビシメロマンチストという話を一言で説明するならば

「一言で説明つたってな、俺あんまり関わってねえしさ」

「でもひっくん一応サブタイトルに出てるくらいだからなんか言おうよっ」

「いやそれを言うなら葵井だって表紙絵飾ってんじゃないか」

「だって、ほら、今回あたし、色々、ね」

「ああ、そういやそうだったっけか。カハハハ、しょうがねえこの人間失格がクビシメロマンチストについて殺して解して並べて揃えて晒して紹介してやんよ！」

「……ひつくん流石にそれはださかったり」

「人がせつかくフォローいれてやったのに平然とださいとか言うなや！」

「それでっそれでっ！ひつくん思うクビシメロマンチストを一言で説明するならっ？」

「葵井が人を殺す話し」

「……ひつくんのばかぁ！」

「うおう！危なっ！なにすんだよお前！」

「ひつくんがイジワルなことを言うからだよっ！」

「いや事実だろうが」

「うう、そうだけども……」

「しかも俺に任せたのはお前だろ」

「・・・ひつくくんは、怖いね。怖いよ。本当に、怖い」

「……」

「だけどあたしは……そんなひつくくんのことが、大嫌いです」

「えいや」

「いった！痛い！ひつくくん暴力反対！」

「今のはお前が悪い」

「違っよっ！ひつくくんがKYなんだよ！」

「俺を伊織ちゃんみたいな立ち位置におくな」

「さて、じゃあ次の質問言ってみようっ」

Q、クビシメロマンチストで一番好きなシーンは？

「好きなシーンってもな」

「あたしはあそこだな。みんなでお酒飲んで騒いだところ」

「葵井が事件起こした時か」

「その前だよっ！ひつくくん性格悪いよっ」

「俺はあそこだな、人間失格がキムチ丼食ってるところ」

「あれはいつくんが自分の味覚を直そうと自分にスパルタで食べたんだよね」

「あいつは馬鹿だな」

「しかも2杯もだしつ。いつくんって実は馬鹿だよな」

「しょうもない欠陥製品だ」

Q、最後に一言

「俺はもう絶対に参加しない」

「ひつくんまだ引きずってたんだ」

「当たり前だ」

「あたしはみんなのことが大好きです！」

「傑作だあな」

「『傑作的ただしそれは同時に戯言』みたいなっ」

「んじゃまあ」

「それじゃあ」

「またいつか」

「皆さんまたねっ」

零崎人識と・・・の人間思考 〵クビシメロマンチスト〵（後書き）

なんだか最後辺りはもうぐだぐだになってしまったぁ……

巫女子さんと零崎の会話は難しいっす

零崎人識と・・・の人間思考　↳ 零崎曲識の人間人間　↳ (前書き)

箸休めが大好きな作者です

零崎人識と・・・の人間思考　　〱零崎曲識の人間人間〱

「これは、零崎人識が毎回色々なゲストを迎えて会話をしていくという普通ではおおよそありえない話、零崎人識と・・・の人間思考。今回のゲストは僕『少女趣味』こと零崎曲識でお送りする」

「.....」

「どうした人識、会話をするという話で口をつぐむという行為は正しいとは言えないぞ」

「.....どうして俺がこんな目に合わなくちゃいけないんだよ」

「ふむ、前回葵井との会話でお前がもう絶対にやらないと言っていたので葵井に代わり僕が来たというわけだ」

「俺は別に葵井が嫌でやらないって言ったわけじゃねえ！もうこの話自体に参加しないって言ったんだ！」

「近頃の若者の言葉を理解するのは難しいな。ナウイだのチョベリバだの、僕には到底分からない」

「俺はそこまで難しいことは言っただけ！そしてそれはもう死語だ！」

「人識、話をあまり脱線させるものではない」

「あんたには言われたくねえ！」

Q 零崎曲識の人間人間で正直言って苦手なシーンは？

「僕は一番最後だな。あれがレンやアスに知られたら羞恥で死ねるだろうな」

「俺はあれだな、曲識のにーちゃんの友達の子口るときだ」

「ああ、ハルクの物まねのあれか」

「さり気なく悪口だな」

「悪くない」

「いや悪いだろ」

「人識お前の欠点は少々短期過ぎるところだ」

「怒らせてるあんたに言われたくはない」

「そもそも積雪さんはお前の金がかからず義手が欲しいという願えを叶えてくれた人だろう、あまり恩人にたいしてそういうことを言うもんじゃない」

「そりゃあそうだが、あれやられてみるとかなりキツいんだぜ」

「それはあの時のお前を見ていれば分かる」

「傑作だよなあ」

Q 零崎曲識の人間人間で驚いたシーンは？

「俺はやっぱ曲識にーちゃんや兄貴や大将やあの人類最強の若かり頃だな。ありや傑作だったぜ」

「僕は自分に妹が出来ていたことだな」

「うつ……」

「まさかお前の彼女が妹だったとは、人識流石に近親相姦はまずいだろう」

「そんなことするか！」

「しかし彼女なんだろう？」

「は、ははっ。じゃあ次の質問に答えてやんよ」

「待て人識。僕はお前に楽譜を渡したな？」

「……さ、さあなんのこと」

「隠さなくても分かっている」

「つつ！……そうだよ彼女って言ったし、楽譜も渡されたし、一応そいつも零崎だ」

「そうか……」

「あ？それだけか？」

「ああ、別にそこまで反応することでもない。ただ家族が増えたそれだけだ」

「そっ」

Q、最後に零崎曲識の人間人間を一言で表すならば？

「曲識のにーちゃんのラブコメディだろ」

「あれは僕の人生の本だ、零崎になってから死ぬまでのことが書いてある」

「確かに、そう思ってみると今までの人間シリーズの中では案外一番密度の濃い話なんだな」

「それじゃあ今回はここら辺で終わっておくことにしよう」

「次こそ俺は絶対来ない！」

「甘いな人識、どんなにお前が嫌がろうとも僕からは逃げられない」

「がっ！それは魂胆か！」

「さて、それでは話のシメだ人識」

「けっ……」

「人識」

「ぐあっ！……あれあれ」

「兄の言うことは素直に聞くものだ」

「かつ、はいはいそれじゃ」

「傑作なもの」

「悪くない」

「次回も多分、悪くない」

零崎人識と・・・の人間思考　　〱零崎曲識の人間人間〱（後書き）

なんか、また終わりの方が雑になってる……

私の弱点だよなあ。

傑作的に戯言なくらい悪くない。みたいなっ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5795m/>

零崎人織の人間関係 哀川潤との関係

2010年10月15日17時41分発行